

ユネスコ傘下の情報系学会 OCCE 2018 での発表報告

Report on Open Conference on Computers in Education: OCCE.2018, sponsored by IFIP
--International Association for Information Processing under the auspices of UNESCO.

江見 圭司 (京都情報大学院大学)

Keiji Emi (The Kyoto College of Graduate Studies for Informatics)

Abstract

It is reported that I presented at conferences sponsored by IFIP held in Linz, on the practical example of Blended Learning utilizing a wearable camera.

1. ユネスコ傘下の情報系学会

1.1. IFIP

UNESCO 傘下団体である IFIP (International Federation for Information Processing 情報処理国際連合) は日本の情報処理学会と提携している。特に筆者が所属している「コンピュータと教育」研究会 (CE 研) は TC3 (Technical Committee3, 教育におけるコンピュータ) という分科会と関係している [1]

1.2. WCCE あるいは OCCE

毎年定期的に行われる TC3 定例カンファレンスがある。WCCE (World Conference on Computers in Education) は 4 年に 1 回開催される大きなカンファレンスで、今回は、2017 年 7 月 3 日～7 月 6 日までダブリンで開かれていた WCCE 2017 である。

2017 年には次期 WCCE 2021 開催地についての投票が行われた。CE 研メンバーがかねてより情報処理学会を通して当会議の日本招致に向けた活動を行ってきた。会議でのプレゼンテーションとそれに続く議決の結果、全会一致で日本開催 (開催地は広島) となり、WCCE2021 が開催されることになった [2]。WCCE が開催されない年は毎年 OCCE (Open Conference on Computers in Education) が開催される。筆者はオーストリア・リンツで 2018 年 6 月 24 日～28 日の期間に開催された OCCE2018 で発表してきたので、それを報告する。

2. 発表内容

筆者 (江見圭司) と一般社団法人 グリーンカラー・プラネットの小林信三の共著で論文は p3 に掲載されているが、実演は江見ひとりで行った。先のアメリカ・ボルチモア市で開催された、Learning Impact Awards (LIA) の内容をもう少し学術的にして、ウェアラブルカメラを活用した「ブレンディッド・ラーニング」(Blended Learning) の実践例について発表した。

LIA 同様、発表会場のブースでは、このイチゴ栽培の研修で使用された動画を実際に電子黒板に投影、ウェアラブルカメラも体験できるように展示し (図 1)、訪れた見学者は、それらのシステムや活用方法などについて熱心に質問していた (図 2)。



図 1 水平投写型電子黒板と筆者

質疑応答では、「この手法でなぜ手間がかからないのかよくわからない」というご意見をいただいた。一方で、実習の e ラーニング・コンテンツの

開発経験者からは、「ウェアラブルカメラをつけた作業者と教材作成者（インストラクショナル・デザイナーなど）を分離するアイデアは素晴らしい」というご意見もいただいた。欧州ではインストラクショナル・デザインという概念自体が目新しいようで、なかなか筆者らのメソッドを理解してもらうのが難しいことを痛感した。



図2 講演終了後も熱心に見学する参加者

図2にあるように、水平投写型電子黒板への関心は高かった。これは、今回の発表のメインではないが、注目度は高かった。

3. OCCE2018 全日程

3.1. 魅力的なリンツ

リンツはユネスコのメディア芸術都市である。リンツにはヨーロッパで最も近代的なオペラハウスと活気に満ちた現代文化の舞台があり、有力な国際企業との経済が活気づいている。環境に配慮した都市とその長い歴史との関係がよくわかる場所である。特にコンピュータ・アートに関しては、Ars Electronica（アルスエレクトロニカ）という施設がドナウ川河畔に建っている。それは、人工知能、未来の博物館・芸術的ジャンル、科学的領域、技術的方向のすべての多様なブレンドがされた作品が作られる場所である。ドナウ川に位置するリンツはヨーロッパの真ん中に位置するだけでなく、あらゆる交通機関から簡単にアクセスできる。

3.2. 全体の流れ

6月24日は博士課程の学生向けプレイベントが行われた。25日午前中に開会式が行われた。

オーストリアのコンピュータ協会の代表や文部省の方の挨拶もあった。26日には研究発表と並行して、博士論文のためのワークショップも行われた。夜には懇親会が開催されて、優雅な夕食をいただいた。

27日には朝から研究発表であったが、夕方からエクスカッションが開催された。リンツは町の中心部そのものが観光地であるので、学会会場から徒歩で気軽に観光することが可能である（図3、4）。



図3 学会会場の中庭。エクスカッション出発前



図4 モーツァルトが滞在したという住居

28日は午前中の研究発表だけで、正午頃に閉会式が行われた。

4. 最後に

2019年はSUZA2019という名称でタンザニア・ザンジバル島で開催される。そして、2021年には日本で開催されるので是非とも皆さんの発表を期待したい。

参考文献

- [1] IFIP 情報処理国際連合,
<http://www.ipsj.or.jp/annai/committee/ifip/index.html>
(2019年1月7日閲覧)
- [2] 斎藤俊則, "IFIP WCCE 2017 から得られた示唆 - そして WCCE 2021 in Hiroshima に向けて -", 情報処理, vol.58, No.11, pp.1040-1041, (2017)

◆著者紹介

江見 圭司 Keiji Emi

京都情報大学院大学准教授
京都大学大学院博士課程修了（人間・環境学専攻）、人間・環境学博士
元金沢工業大学専任講師
ET ロボコン関西地区実行委員長、情報処理学会「コンピュータと教育」研究会運営委員